

湊川隧道の一般公開における人材育成の 取り組みについて

岩木 圭子

兵庫県 神戸土木事務所 公園砂防課 (〒653-0055兵庫県神戸市長田区浪松町3丁目2-5)

湊川隧道は1901年に竣工した近代河川トンネルで、現在は近代土木遺産として保存・活用されている。各種メディアで紹介されるに伴い湊川隧道の知名度が高まり、来訪者や学校の校外学習が増加する一方で湊川隧道を説明するボランティアガイドは、人員不足という課題があった。この課題を解決する目的で、「湊川隧道保存友の会」と共同でガイド養成講座を開講した。湊川隧道の歴史や構造の講義、グループワーク等を通じて湊川隧道の基礎知識を習得できる講座を行い、一定数の参加を得て新たなボランティアガイドが誕生した。今後は、ガイドが活躍する場の提供や活動の継続など、やりがいを感じて活動できる仕組みづくりを検討していく。

キーワード ガイド養成講座、人材育成、土木遺産

1. はじめに

湊川隧道は、1901年（明治34年）に竣工した日本で初めての近代河川トンネルで、新湊川トンネルの竣工に伴い、2000年に河川トンネルとしての役割を終えた。

湊川隧道の保存や維持管理方法を検討する会下山（えげやま）トンネル保存検討委員会（以下、「検討委員会」）によって、技術的、意匠的、系譜的評価が認められ、近代土木遺産として保存することが提言された。

2001年に検討委員会のメンバーの呼びかけで、地域住民を中心とする「湊川隧道保存友の会（以下、『友の会』）」が発足し、見学会や講演会、会報の発行等を通じて、湊川隧道の魅力発信に取り組むこととなった。

2001年の土木の日（11月18日）に合わせて「新湊川ウオークにおける見学会」を開催し、これが湊川隧道の最

初の一般公開となった。この見学会は兵庫県主催で開催し、友の会は協力団体としての参加であったが、2006年以降は友の会が神戸土木事務所から定期一般公開や湊川隧道通り抜けイベント等に関する事業を受託し、湊川隧道が持つ近代土木遺産としての魅力発信の一つとして説明会を行っている。

湊川隧道の歴史や構造については、現役時に隧道関連業務に携わった兵庫県土木技術職員OB（以下、「OB職員」）が友の会会員となって説明を行ってきたが、高齢化や人員不足が大きな課題となっていた。ここでは、2022年度、2023年度に行った湊川隧道ガイド養成講座を例に、見学会等で魅力を広く発信していくための人材育成について述べる。

2. 湊川隧道の見学をとりまく現状

湊川隧道は、明治時代に竣工したレンガ造りの河川トンネルであり、役割を終えた現在は安全管理や防犯のため、門扉で閉鎖し立ち入りを禁止している。（写真2.1）そのため、隧道内部の見学は、毎月第3土曜日に開催する定期一般公開と年に一回開催する湊川隧道通り抜けイベントに限られ、その他は校外学習や土木に関する学術を目的とした団体の見学を随時受け入れている。

定期一般公開等では、友の会会員が隧道内部で説明会を行っている。平日の団体見学対応は神戸土木事務所の職員が行っているが、特に専門的な説明を求められる学



写真 1.1 湊川隧道

術関係者等に対しては、友の会会員のうち湊川隧道の保存や新湊川トンネル工事に携わったOB職員が対応する等、友の会と神戸土木事務所が連携して取り組んでいる。

一般公開が始まった当初は、湊川隧道の知名度が低く見学者も少なかったため、2006年からは説明会に併せてミニコンサートを行う等、見学者の増加に向けた取り組みを開始した。2014年頃からマスコミに取り上げられる機会が増え、それに伴い見学者が増えることとなった。

(図2.1)



写真2.1 湊川隧道門扉（定期一般公開時）

3. 友の会の抱える課題

友の会が説明会を行う上で抱えている課題について、以下のことが挙げられた。

(1) 友の会会員の減少と高齢化

友の会会員数は、2004年に124名となり組織として活動が安定してきた事を機に定期的に活動する正会員、活動をサポートする準会員と会員の棲み分けを行った。正会員の登録者数は2010年の54名をピークに減少に転じ2022年4月時点で39名であったが（図3.1）、そのうち高齢化の影響で継続的に活動している会員は20名前後であった。また説明ができるOB職員は特に高齢化・減少が著しく、2021年度には4名から2名となり、説明者の養成が急務となっており、長く活動できる会員をどのように確保するかが課題であった。

(2) 友の会会員から説明者が育成されない

湊川隧道に興味を持って友の会会員になったとしても、定期一般公開ではミニコンサートの舞台準備や片付け、見学者受付などの対応に時間を取られ、OB職員による説明内容を聞いて学ぶ時間がなかった。また友の会は、設立当初から多くの県土木職員が関わってきた経緯から、会員の間では説明会対応はOB職員が行い、会場設営等はその他の会員が行うという暗黙的な認識が定着していた。更に湊川隧道に関する勉強会等、知識を増やす機会が限られていたこともあり、新たな説明者が育成されない状況にあった。このようなことから、どのようにして友の会会員から説明者を育成していくかが課題であった。

(3) 友の会会員間での説明内容の共有

湊川隧道の説明はOB職員が中心となり収集した資料を基に行われており、その収集期間は約20年に及び現在も調査や資料収集は続いている。OB職員が収集した新しい知見は神戸土木事務所と共有しているが、友の会会員間では情報の整理が一元化されておらず、伝聞のような継承方法になっていた。このため情報を友の会会員間でいかに一元化し共有していくかが課題であった。

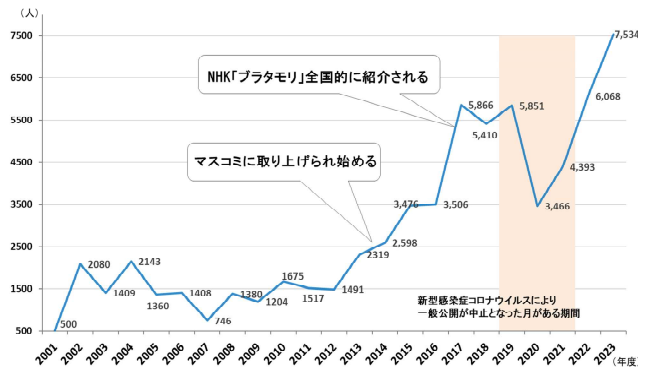


図2.1 一般公開見学者数の推移（通り抜けイベント含む）

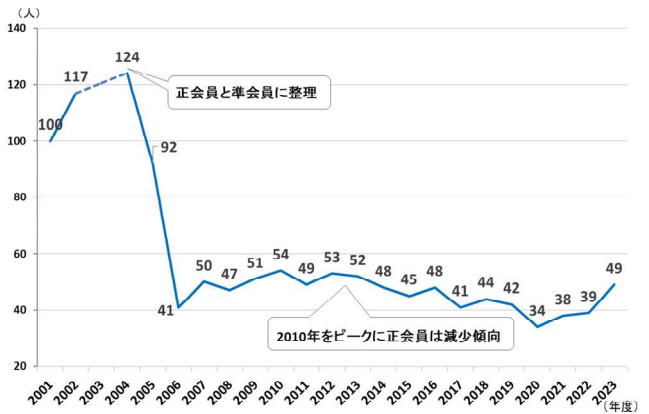


図3.1 湊川隧道保存友の会 正会員数推移

4. 人材育成手法の検討

上記課題に対応するため、湊川隧道の説明を行うボランティアガイド（以下、「ガイド」）を養成することを目的とし、友の会と共催で「湊川隧道ガイド養成講座」を開講することとした。

ガイドの養成は、地域の活性化に積極的に取り組む人材の育成・確保・活用の一つの手法として、観光庁や多くの地方公共団体でも実施されている。

(1) ガイド養成講座の周知

湊川隧道周辺からボランティアの応募があるか不安があったが、総務省統計局の調査からボランティア活動者の主な年齢層は40歳以上が多いことが分っており、通り抜けイベント参加者に行ったアンケート結果を基に湊川隧道周辺に居住する40歳以上を調査したところ、歴史・文化遺産もしくは建築物に興味を持っている参加者が周辺居住参加者の約4割を占めていることがわかった。よって湊川隧道周辺の住民からガイドの担い手を確保することが見込めると判断した。

講座初回となった2022年度は、定期一般公開等でガイド養成講座の募集チラシを配布した他、県の記者発表と県民広報誌を利用して周知を行った。地元紙である神戸新聞に大きく取り上げられたこともあり、申込み期間1ヶ月で17名の申し込みがあった。(うち5名は友の会会員)

翌2023年度は、前述のアンケート結果や前年度の経験により、ボランティアガイドに関心を持つ人が地域に一定数存在していることを把握したことから、記者発表と県民広報誌に加え、県のボランティア活動支援組織であるひょうごボランタリープラザと協力し周知を行った。また定期一般公開や通り抜けイベント以外にも校外学習による見学が一定数あることから、学校厚生会にも協力を依頼し児童・生徒への対応を熟知している教員OBを対象にチラシの配布を行った。その結果、2023年度も申込み期間1ヶ月で13名の申し込みがあった。

(2) カリキュラムの工夫

ガイド養成講座を機に情報の一元化を目的とした説明資料の見直しを行いテキストを作成した。隧道内部での講義も取り入れ、新湊川や湊川隧道を踏査することで座学だけでは分かりにくい新湊川との関係性や湊川隧道の構造を現地で確認し、土地感や土木に関する知識があまり無い受講者にも理解してもらえるようにカリキュラムを工夫した。

また説明会で使用しているパワーポイント原稿に、受講者が考えた説明文を追加し、グループ内で発表を行うグループワークも実施した。グループワークでは各グループに講師(OB職員)を1名配置することで、講師に質問しやすい雰囲気作りに配慮し、受講者の知識や理解が深まるような工夫も行った。(写真4.1)



写真 4.1 グループワークの様子(2022年度)

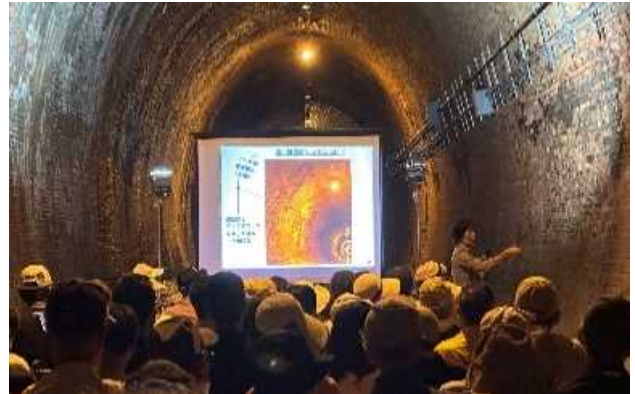


写真 5.1 一般公開説明会の様子(ガイドは2022年度修了者)

あり、今後の講座に向けた改善点が把握できた。

ガイド養成講座を行うことで、2022年度は12名のガイド(平均60.3歳)が誕生し、友の会会員に登録してボランティア活動を始めた。このうち3名が2023年度の定期一般公開でガイドとしてデビューし、他の受講者も順次ガイドとして活動していく予定であり、講座がガイド育成に大いに役立った。(写真5.1)

友の会会員登録をガイドの要件としたことにより会員数も増え、様々な背景を持った会員の増加によりこれまでとは異なった視点からの意見交換も積極的に行われ、友の会の活動が活性化している。それに伴い、ボランティア自身の自主性も芽生えてきた。コロナ明けの2022年から定期一般公開見学者が急激に増加した際は、雑踏整理等に自主的に動けるボランティアが少なかったことから神戸土木事務所の職員が休日出勤することで対応してきた。しかし会員の増加により2024年度からは友の会のみで見学者対応が可能となり職員の負担軽減にも繋がっている。

更にボランティアガイドの誕生は「湊川隧道の技術的、意匠的、系譜的評価の継承」の重要性を友の会全体に再認識するきっかけとなり、「長らく途絶えていた勉強会を再開しよう」と声が上がると気運の高まりが見られ、2024年秋にボランティアガイドが中心となって勉強会の再開を予定している。

5. ガイド養成講座が与えた効果

ガイド養成講座を終えて行った受講者アンケートによると、9割以上が講座の内容を理解できたと答える一方で、「専門用語を理解すること」や「湊川隧道の膨大な歴史を2日の講座で理解すること」は難しいとの意見も

6. ボランティアガイド誕生から1年を迎えてきた課題

ボランティアガイド誕生から1年を迎えて、講座の修了者は友の会で精力的に活動する一方、課題も見えてきた。

(1) 個性に配慮したガイド

定期一般公開ではスクリーンを使用し多い時では200人以上の見学者を前に説明することがあるため、ガイド養成講座ではそのことを前提とした説明手法を講義していたが、この1年のガイドの活動を見ると個人の性格がガイドの仕方に大きく影響することがわかった。

大勢の見学者の前でアドリブを交えながら話すことを得意とするガイドもいれば、パネル等を利用して少人数グループの質問に答えながら説明することが得意なガイド、見学者に声掛けして個別に説明することが得意なガイドなど、各自がそれぞれの個性を生かしながらガイドを行っており、説明をする手法について様々なやり方があるという気付きがあった。

一方で、大勢の前で説明することが不得手なガイドがスクリーンを利用して説明に挑戦したものの、緊張から途中で説明を止めてしまったという事例も発生している。大勢の前で説明する場面は定期一般公開以外でも今後増えていくことが考えられるため、知識の習得以外に話術をスキルアップしていくことが必要である。

(2) パワーポイントのスキル

ガイド養成講座開講に伴い、友の会と共同で説明内容の見直しを行いパワーポイントと読み原稿を作成した。このパワーポイントは、ガイドが各自で加工しガイドの特徴が表れる説明を行うことを目的として作成したものであったが、パソコン操作に不慣れなガイドが数名おり、オリジナルのパワーポイントを作れないことがわかった。

ガイドがオリジナルの原稿に加工することができるよう、パワーポイントの操作方法も含めてフォローアップしていくことが課題である。

(3) 外国人見学者への説明

湊川隧道は、2025年開催予定である大阪・関西万博に合わせて、兵庫県のフィールドパピリオンの一つとして登録されており、今後も外国人見学者の増加が見込まれる。

現在は、英語のパネルとパンフレットを用意しており、希望があれば紹介配布している。

今回のガイド養成講座では、英語に堪能なボランティアガイドも誕生し、外国人見学者に積極的に声掛けを行い説明しているが、隧道の説明には専門用語も多いため、説明に苦慮している場面も見受けられる。

この1年で3つの問題が見えてきたが、人前で上手く話す方法やパソコンの使い方は、友の会と共同で講習会を開催することを検討中である。

また外国人見学者に対する説明については、県庁の国際課や観光振興課へ協力を仰ぎ、外国人見学者の受け入れについて助言を求め環境を整えていく。

7. ボランティアガイドの今後の展開について

講座開講により新しいガイドが誕生するという一定の効果を収めたが、ここでは今後のガイドの展開について述べる。

(1) ガイドとしての活動機会の提供

湊川隧道の説明をする機会は、毎月の定期一般公開時と年一回の通り抜けイベント時に数が限られている。ガイドのモチベーションや知識維持のため、定期的に活躍できる場を提供していくことが必要となる。

従来の定期一般公開でミニコンサート目的の見学者が増えていることを受け、2023年9月からの試行期間を経て2024年度から正式に隧道見学に注力した一般公開を第1土曜日に開催していくこととなった。

この一般公開は、従来のスクリーンを使用して説明を行うものではなく自由見学とし、希望者がいれば個別にガイドを行う形式を取り入れた。また見学者の質問に答えやすくなるように、展示パネル前や隧道内部にガイドを配置して、従来の定期一般公開よりもガイドが説明する場を多く用意することとした。ミニコンサート目的ではなく湊川隧道そのものをゆっくりと見学したい人が第1土曜日に多く訪れることになれば、見学者とガイドが直接言葉を交わす機会が多くあり、見学者のみならずガイドにとっても良い環境での隧道説明が期待できる。

(2) 地域で継承していく

現在、校外学習の際は、神戸土木事務所の職員が説明を行っている。神戸市内の小学校では、3年生の社会科

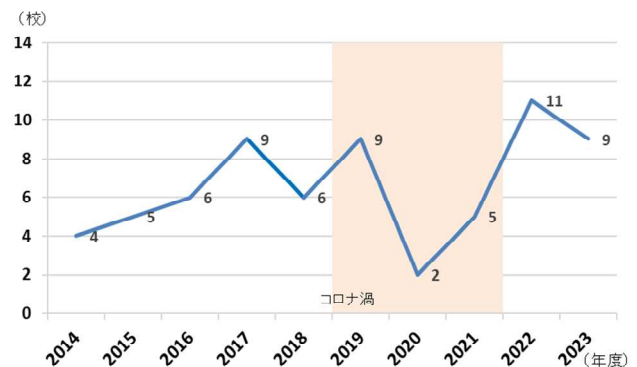


図 6.1 湊川隧道で校外学習を行う学校数推移

の副読本に湊川隧道が掲載されていることから、見学は増加傾向にあり、2023年度は9校819名の見学があった。

(図6.1) 湊川隧道に関するイベント等を担当する企画調整担当は3名体制であり、課全員で見学対応にあたっている。また、湊川隧道への移動や準備等で、1回の見学対応が半日掛かりの業務となり、他の業務への負担も大きい。そこで、校外学習の対応をガイドに担ってもらうことで、職員の負担軽減やガイド活動の場の創出に繋げて行くことを目的に、2023年度の小学校による校外学習に合わせて小学生向けガイドの様子を見学する希望者を講座修了者から募ったところ、12名が参加した。見学後は校外学習の説明について意見交換が行われ、ガイドが校外学習に対し高い感心を持っていることがわかった。

今後はガイドが校外学習で説明を行い、地域の子供達に湊川隧道の歴史や価値を伝えていくことで、湊川隧道を地域で継承していく枠組みを確立していく。

謝辞：この論文を書くにあたり、データの提供整理を行う事にご協力いただいた友の会の皆様、多忙な業務の合間に原稿の推敲など協力いただいた神戸土木事務所職員に感謝申し上げます。

異動：2024.5から所内異動により、湊川隧道の担当を外れております。